

# 惜春のカクテル

## 身近伊代

日中から桜見物客で周辺は賑わっていた。

ようやく夜の帳が降りてきて、昼間の騒音は随分少なくなってきた。

客が来るにはまだ時間があるな、と思いながらバーテンダーのKは氷の塊を一定の大きさに削る作業の手を休め、アイスピックを下に置くと、肩の凝りをほぐそうと首を廻し始めた。

そのとき、ドアが開いた。おや、随分早い客だなと、Kは眼を上げると客を見やった。

「いらっしや……」と言いかけて、Kは後の言葉を飲み込んだ。

女の表情は溢れるような懐旧の情感に満ちていた。ふたりはしばし無言のまま互いに見詰め合った。

☆

女と知り合ったとき、Kは一流のバーテンダーを夢見て修業

中の身だった。

当時、お濠端にあるパレスホテルのバーには、その昔、初代のチーフバーテンダーでミスターマティーニと言われた伝説のバーテンダーから直接教えを受けた何人かのバーテンダーがいた。そのうちのひとりで、自分の店を開いたY氏というバーマンのもとに弟子入りしたKは日々技術、知識を磨いていた。

偶の休日はKにとっては唯一の息抜きの日だった。

ある日、映画が好きだったKは、いつもよく行く映画館に入ってきた。

プログラムを見ていたKの隣の席に、女性の二人連れが入ってきて、

「空いています？」と声を掛けてきた。

「えっ、はい、空いています」

振り仰いだKは一瞬その声の主に眼を奪われた。美しい女だった。

☆

その日からKはその女が忘れられない存在になった。それからというもの、折につけては女の面影が目蓋に浮かぶようになった。

二ヶ月ほど過ぎた頃、Kが働く店に偶然そのときの女が友達

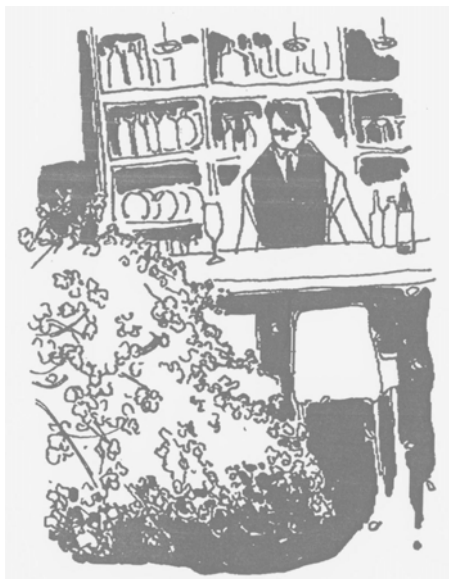
らしい連れとやってきた。

Kは周りに音が聞こえたのではないかと思う位心臓がドキンとした。無論、女はKのことは覚えていなかった。

Kは女性たちからなにか話しかけられても、しどろもどろになり勝ちだった。

脇でY氏が、何気なくKを見ては、首を傾げていたが、若いKが美しい女性を目の当たりにしては当然の反応なのだと思います、横を向いて苦笑をかみ殺していた。

穏やかななかにも粹な人柄がにじみ出ているオーナーのY氏



と真面目な若いバーテンダーのKのふたりに好印象を持ったのか、女はそれからよく店に来るようになった。

Kも次第に彼女たちとリラックスして会話ができるようになっていった

だが、Kの密かな想いはいつまでも隠し通せるものではなく、女のほうもいつとはなく、Kの想いに気が付くようになっていた。

「ね、Kさん、わたし、来月誕生日なの」

「そうですか、九月何日なのですか？」

「九日なの」

「おや、重陽の節句ですね」

「あら、よくご存知ね」

「いえ、偶々知っていただけです」

「会社の人たちが、お祝いしてくださるらしいの。帰りに寄ろうかな」

「お待ちしています」

Kの胸に小さな灯が点った（そうだ彼女に捧げるオリジナルのカクテルを創ろう）

☆

「わあ、綺麗な色」

女は自分の前にある艶やかな紅色のカクテルにしばし眼を奪われた。

「なんていうカクテルですか？」

「もともと〈夜桜〉というカクテルがあるのですが、ベースのジンズをライトラムにしてレシピを少し変え、ネーミングを「宵桜」にしました。

そつとカクテルを口に含んだ女は眼を見張った。

「美味しい……」

「有難うございます。これはオリジナルなので、貴女へのお祝いに贈ります。そして、貴女だけのカクテルにしましょう」

「まあ、ほんと？ 有難う。嬉しいわ」

女は輝くような笑顔でKを見た。

☆

だが、結局、Kはバーという劇場から一步も踏み出すことなく終わった。

女は翌年会社の同僚と結婚した。そして、その後は店に現れることはなかった。

いま、何十年ぶりかでKは女とカウンター越しに再会したのだ。

「先日のかたがお嬢さんだとすぐ判りましたよ」

「そう、私も娘からカクテルの名前を聞いてすぐ判ったのよ、あつ、Kさんだって。あの日、私の義兄が娘を連れてここに来たのですってね。偶然とはいえ、Kさんのお店だったとは。世の中ってほんとに狭いわね」

「私もビックリしました、貴女にそっくりなので」

「Kさん、娘に出してくださいださった〈宵桜〉はわたしへのメッセージだったのね？」

「……………」

「どうとうご自分のお店を持ったのね。とてもシツクな感じのいいお店ね」

女はさりと話題を変えた。

「有難うございます」

「二十五、六年になるかしらね」

「早いものです、月日の経つのは」

女は感慨深げに肯いた。

☆

閉店後、Kは時間の経つのも忘れてカウンターに立ち尽くしていた。

夜は深く、その濃さを増していた。